

桐が谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第46号 2012年6月20日

発行 中部学院大学 宗教委員会
中部学院大学短期大学部

〒501-3993
岐阜県関市桐ヶ丘二丁目1番地 TEL (0575) 24 - 2211

5月14日開催、創立記念礼拝奨励

「悔い改めて、知恵ある生活をする」

林 茂 則 (岐阜済美学院 学院長)

5月14日は本学の「開学記念日」です。本学は開学してより、大学は15年、短大は45年となりました。今年はこの日が月曜日でしたので、開学に貢献された方々を思いをいたし、「建学の精神」を想起しながら、「創立記念礼拝」をまもりました。林学院長が語りかける口調でお話くださったメッセージを改めて味わいたいと思います。

岐阜済美学院は6年後に創立百周年を迎えます。こうした時、そのルーツを探り、自分の立っている時と場所を明らかにしながら、自分を知り、自分自身を確立することは大切です。そうすれば、自分の学ぶべきこと、なすべきことが明らかになります。そこで、本学院の沿革をたどりながら、これからの歩みについて考えたいと思います。

本学院は1918年9月18日に、片桐龍子先生が岐阜裁縫女学校の設置の認可を受けられたことに始まります。その当時の女性は地位が低く、今の日本に生活している者にとっても想像することのできないほど悲惨な状態でした。貧しいだけでなく、過酷な労働を強いられ、奴隷のような生活状況におかれていました。ですから、龍子先生は女性の地位を向上させるために、女性が学ぶこと、教育こそが力になると考えて女学校を開設されたのです。当時の産業といえば、繊維産業が中心であり、糸を撚る、それを布に織り上げる、それを衣服にする技能を持っていることは、生きていくために大きな力になりました。身につけた技能を持って

いれば、自分を活かすことができ、生活費を稼ぎ、家を支えていくための大きな力になった時代でした。先生の教えを受けて生活の知恵や技能を身に付けた卒業生は、それに応えて自立し、学び続けながら良き家庭



参加者に語りかける林学院長

を築きあげて地域にも貢献されました。

こうした実際に役立つ、応用を重視する学問は実学と言います。日本では福沢諭吉が提唱して、実学の大切さを地道に積み重ねてきました。そうした蓄積の上に、現在の日本は科学技術立国として繁栄をしてきたと言えます。しかし、最近では技術をおろそかにし、実学教育が軽視されています。日本のこれからを考えると、技を身につけること、技こそが生きる力であることを再認識する時ではないでしょうか。

龍子先生の跡を引き継がれたのは片桐孝先生です。建学の精神に「神を畏れることは知識のはじめである」を掲げられ、福音主義キリスト教に基づく教育事業を推進されました。そして、済美高校や中部女子短期大学において、時代や地域の要請に応えた看護、保育、幼児等の教育を伸展され

ました。そのおかげで本学院は看護や保育、幼児教育に大きな力を持ち、知恵を蓄え、実学教育の流れを大きくしてきました。また、岐阜県の教育者に母性の大切さや産業教育の重要性を教え示していただき、地域の産業教育発展にも寄与されました。

また、孝先生は、建学の精神を具現化するためには、聖書から知恵を得て、それを蓄えるだけでなく、自ら、積極的に「知恵ある生活をしなさい」「キリストから学んだことを実行しなさい」と奨めておられます。

このようにルーツを探り、歴史を考えてみると、本学院の教育は知恵の蓄積があり、その土台の上に築かれています。ここで学び、働く者に自信と誇りが持てると思います。ところが、私たちは罪



深く、弱い者です。フィリピの信徒への手紙 4章 8 節に教えられている「すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名

誉なこと、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい」に反して、受け留めるところか、否定、批判しがちです。本学院に学ぶ者、働く者は、創立百周年を迎えるに当たって、自らの罪と弱さを受け入れて、悔い改め、その上で知恵ある生活を実践することが求められています。今こそ、主なる神の示されている幻を明らかにすると共に、それを具現化するためにそれぞれに与えられている賜物を捧げる時であると確信しています。

フクシマから

上竹裕子牧師のお話を聞く

去る 4 月 19 日 (木)、関キャンパスのチャペルに、福島県いわき市の磐城教会で牧師をしておられる上竹裕子先生が来てくださいました。その週、名古屋を中心に各地で、東日本大震災と原子力発電所事故の状況について講演されていた先生を本学にお招きできたことは、被災地の方々に心を寄せる大変よい機会となったと思います。先生は、いわき市内のキリスト教会による震災支援ネットワーク いわき CERS ネット と共に地域復興の歩みをされています。

礼拝では聖書を中心にお話しくださった上竹先生は、昼休みの時間、スライドを用いていわき市の被災地の 1 年を振り返りながらお話しくださりました。また、教会に隣接する清風幼稚園の放射能除染の取り組みなどを説明してくださり、国の



基準値を下回る放射線濃度であるにもかかわらず、園児の安全を第一に自力で除染を行うなどの取り組みに、子どもたちと一緒に生きる姿を感じることができました。

本学では昨年来、様々なボランティア活動や支援活動に学生、教職員が取り組んできました。息の長い取り組みが求められています。先生との出会いをきっかけに、福島の被災地の方々との交流が進められることを願いますし、そのようにしていきたいと思います。(志村 真)

礼拝での オルガン奏楽について

杉山祐子（短期大学部 幼児教育学科 准教授）

木曜日礼拝のオルガン奏楽を、本年度から学生の有志が担当しています。きっかけは昨年度の卒業礼拝の時、数人の卒業していく学生たちが演奏バルコニーに上がってきて、驚きの声を上げたことです。「ここで演奏していたんですね！ こんな素敵な場所があるなんて、今日気がついて卒業できてよかったー」と、鍵盤に触れたり記念撮影をして卒業していったことでした。崇高なイメージのパイプオルガンがこんなにも学生の傍にあることは本学の魅力であり、鍵盤に触れ音が鳴ったときの感動は得がたいものです。この感動を一人でも多くの学生に味わってもらいたいと思いました。

まずは幼児教育学科の学生に、礼拝での奏楽者を募集しました。経験のある済美高校出身の学生や、本学に入ってオルガンに憧れて立候補してく

れた学生もいます。忙しい授業の合間を縫って練習時間をとり、いざ礼拝



で緊張しながら奏楽した体験の感想です。「私はオルガンに触れるのも初めてで、貴重な体験ができました。同じ鍵盤を押してもストップによって響きが違うのですごい楽器だと思いました」「普段練習しているピアノと違い、木の柔らかい感触が気持ちよく、心まで柔らかくなります」という楽器の魅力や、「自分が弾いた時よりも声が後から聴こえてくるので時間差があることに気がきました」「間違えないで弾くことで精一杯だったけれど、周りを見る余裕もできてたらいいなと思いました」という、会衆が歌うための伴奏の役目も感じています。この体験が各々の学習や生活で生かされることでしょう。

各務原キャンパスの チェンバロ

各務原キャンパス2階グロリア・ホール前のロビーに黒い美しい楽器がおかれています。チェンバロという珍しい楽器です。これは、各務原市立那加第二小学校・各務原市立桜丘中学校出身の鳥居正人さんという職人さんがひとりで4年の歳月をかけて製作した楽器で、フランドル様式（フレミッシュ）という形式で、2段階の鍵盤、3種類の弦を備え、バロック時代の音律に合わせてチューニングすることができます。この楽器は英語ではハーブシコード、仏語ではクラブサンといい、外観はグランドピアノに似た鍵盤楽器ですが、ピアノよりも歴史は古く、17世紀にはイタリア、フランスなど西ヨーロッパを中心にいろいろな形の

ものが製作されています。ピアノと違うのは、弦を「叩く」のではなく「爪」ではじいて音を出す構造になっていることです。そのため、音色はむしろ琴やギターに近く、独特の優しいハーモニーを奏できます。



鳥居さんはこの楽器を若い学生のいる中部学院大学・短期大学部に寄贈することによって、大学の講義や礼拝、シティカレッジなどで、学生さんをはじめ地域の多くの方々が親しんで下さることを希望しておられますので、どなたでも遠慮なく自由に触れて親しんで下さいますように。



【予告】 宗教講演会

日時：7月2日（月） 第2限（11:00～12:30）

場所：中部学院 関キャンパス 11301 教室

演題：「『人間愛』とは一体何だろう

——古代キリスト教から現代へ」

講師：関西学院大学神学部教授

土井健司氏

講演要旨：18世紀に「医療倫理」という言葉を導入したトマス・パーシヴァルは「医師はこれらの不幸な病人たちに、人間愛と名誉にかけてありつたけの優しさと寛大さを保証する義務を負う」と述べたといひます。また遙か昔、医学の祖とされるヒポクラテスの名を冠した文書『医師の心得』にも「人間愛のあるところ、そこに医術への愛もある」という言葉がみられます。西洋では、医療、看護、ケアといったことを考えるさいに「人間愛」という言葉を支柱のひとつとしてきたと言ってよいでしょう。

わたしはここ十年近くこの「人間愛」（フィランソロピア）という言葉の歴史と意味を古代キリスト教思想研究のなかで探っています。その結果、もともと古代ギリシアで生まれたこの言葉の意味が、古代キリスト教のなかで変化していることに気づきました。この言葉のなかで述べられている「人間」とは誰のことか、一体、誰が愛されるのかということなのです。

カッパドキア三教父と呼ばれるバシレイオス、ナジアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオスは、古典的な「人間愛」に照らすなら、およそまったく愛するに値しない人びと——当時は「貧者」と呼ばれました——を「人間」として愛するように説きました。とくに「レブラ」と呼ばれた病気の貧者たちです。バシレイオスはこの人びとのために病院を建てました。今日世界最古の病院の一つと言われます。また二人のグレゴリオスは説教を通してバシレイオスの病院を支援するなどしました。その際に聖書の思想、また神に関する考え方がその基礎にあります。たとえば受肉の思想です。神が人間になったことで、それまで見過ごされていた「人間」という視点が開けてきます。ここではマタイ福音書25章40節や第二コリント書8章9節の言葉が深く響いています。

社会のなかでおよそ人間扱いされない人びとに「人間」として関わっていくことこそ、古代キリスト教の見出した「人間愛」だと言えるでしょう。

講師略歴：京都でクリスチャンホームに育つ。関西学院大学神学部に入學し、同大学神学研究科博士前期課程、京都大学大学院文学研究科博士前期課程をへて、同博士課程中退。京都大学博士（文学）ならびに博士（神学）。京都大学文学部助手、玉川大学文学部助教授をへて、現在関西学院大学神学部教授。2世紀から4世紀の古代キリスト教思想、またキリスト教的視点からの生命倫理の研究を行っている。

主な著書に、『キリスト教は戦争好きか』（朝日選書）、『キリスト教を問いなおす』（ちくま新書）、『神認識とエペクタシス』（創文社、第7回中村元賞）、『愛と生成と意志の神』（教文館）、『古代キリスト教探訪』（新教出版社）などがある。